

専徳寺報

第435号

平成29年11月11日発行

浄土真宗本願寺派
専徳寺

〒740-0044 岩国市通津2764
☎0827-38-1124 FAX38-1000

<http://sentokuji-iwakuni.net/>

専徳寺

検索

専徳寺納骨堂受付中

- 法座当番：通津中地区
- 参拝セット（念珠・聖典・式章・聴聞カード）
お持ちください。



ご講師

本願寺派布教使 白石 智昭 師

（美祿市）

日時

11月24日（金）	昼 1時半～3時半
	夜 19時半～21時
25日（土）	昼 1時半～3時半

阿弥陀さまのみ教え（お経）を永代にわたって伝えていく《永代経法要》は、報恩講・降誕会と並ぶ三大法要の一つです。ご都合をつけてどうぞご参詣ください。夜座も温かくしてお待ちしています。

永代経法要

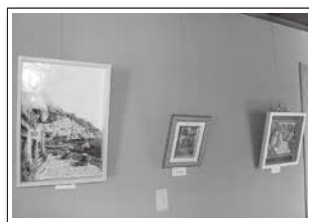
併修 門徒年回忌総追悼法要

秋の展示会

7回目の今年も多数出展がありました。有り難うございました。

【出展者】

穴水千枝美（書）、上野克枝（シャドーボックス）、小方麻紀子（油絵）、岡部美代子（ツールペイント）、河村アサ子（折り紙）、木村智恵子・裕見子（手芸）、塩中幸枝（手芸）、通谷尚子（手芸）、土井智恵子（押し花）、藤重利子（書）、村岡房江・恭子（布花）、村中恵子（油絵）



如来・人・言葉

107

あう為に別れる

— 阿弥陀経法話 —

雑賀正晃

悲しみの中に

可愛い盛りのお子さんを亡くされた悲しみの涙のかわきませぬ中に、今しみじみと『阿弥陀経』を拝読させて頂いたことでもあります。お仏壇に飾られたお写真。あのにっこり笑っていらっしやるお顔を見るにつけても、悲しみがまたしてもこみ上げてくることだと存じます。それだけに一人深くお経さまに遇ってくださったことと思うのであります。

さて、この『阿弥陀経』は、大経に対して、『小経』と申すのであります。このお経は、諸仏が大経に説かれてあるお救いが、嘘ではないぞと証明に立たれたお経であります。殊に、お釈迦さまご自身が「我見是利、故説此言」(我れこの利を見るが故にこの言を説く)——この大きなご利益のあることを、私はこの目でみてきたからこそ説くんだよ——と仰せられるのです。

さて、お釈迦さまは、私たちが人間として生まれた限り、どうしてもあわねばならぬ八つの苦しみ(八苦)をお説きくださいましたが、その中に「愛別離苦」といつて、

愛しあうものが別れねばならぬ苦しみを数えられてあります。

生まれた者は必ず死なねばならぬ。逢うた者はいつか別れねばならぬ。しかも、その「いつかは」ということは、いつ、どこで、どんな形で出てくるかも知れぬなどと、耳にたこのできるほどに聞かされていることであり、また誰一人として知らぬ者はいないはずであります。さてそのことが厳しい事実となつてわが身にふりかかつて参りますと、いかにしても耐えきれぬ悲しみを感ぜさせられるものであります。

目の前で次第に冷たくなってゆくわが子をゆすぶりつづけて、わが子の名を呼ぶ。再び口を聞くはずのない体にとりすがつて、「もういつぱいお母ちゃんと呼んでおくれ！」と願わずにはおれない。残された写真をみるにつけても、「何故、お母ちゃんをおいて死んでしまったの」と語りかけずにはおれない。

死んだものがものを云うはずはない。なのにもう一ぺん、母と呼んでくれと願う愚かさ。その愚かさこそが、教に逢うことができるのであります。その愚かさこそが有り難いのであります。

悲しみを通して

今現に、その悲しみと痛みの中に皆さんが沈んでいらっしやる。この中から、悲しみを通してはじめて得られるもの、言い換えまますなら、この大きな悲しみが単なる悲

しみに終わるのではなく、「私の生涯にとつてあの悲しみがまことに大きな恵みでありました」と、心から合掌の捧げられるような味わいをつかんでいただきたいと思うのであります。

子は再び生きてはまいりません。しかし死んだ子を生かす道はあるはずでございます。といつて、悲しみを喜べというような無理なことを申すのではありません。泣くなというのは無理、悲しむというのは、その身になったことのない人の冷たい言葉であります。

悲しんで当たり前、泣いて当然であります。ただ私が強く申し上げたいのは、悲しいから泣いているというだけでは、残念ながらその涙はいつかは必ずや乾いてしまうのです。かわいてしまつたら、もう泣いたことさえ全く無意味に終わってしまうのです。

この涙の中に、涙した者でなければ解らぬ、涙そのものが教えとなつてとどけてくれる尊いものをつかんでいただきたいのであります。

※

俳聖と称される松尾芭蕉が、その友人がかげがえのない一人息子を亡くして悲歎の涙にくれている時に出したくやみ状について、有名な話が伝えられています。

愛し子の遺骸を前にして、座りこんだまま、ただ声もなく、火鉢にもたれかかって、ため息と共に涙している夫婦のもとに、芭蕉からの一通の手紙がとどけられたのです。

相当に分厚い巻紙でした。ところが封を切ってみますと、始めからおしまいまで全くの白紙。なんにも書いてはいないのです。ただ巻紙の最後に、たった一句だけが書かれていたのです。

その真つ白の巻紙をひろげてゆきながら、じーっと考えこんでいたこの友人。最後の一句をよみ終えて、

「持つべきは親友、ああ、有り難い！」
と、お念仏したというのです。

芭蕉にしてみれば、恐らくくやみの言葉も慰め言葉もなかったのでありましょう。言葉にしたらもうウソになるのです。

「君の心中を察するとき、私にはいふべき言葉もない」

と、その心を白紙に托して語らしたのでありましょう。

と同時に、その悲しみを決して無駄にしてくれるなよ。その悲しみを通して、真実の教にふれてくれよと願わずにはおれなかったに違いありません。

その時の一句が、

埋火も消ゆる涙のにゆる音
というのです。



夫婦二人きり、ただ言葉もなく、時々顔を見合わせてはため息をつき帰らぬ子を見つめては涙をこぼす。その涙が火鉢の埋火の上にポトリポトリと落ちて、ジュツジュツと音を立てる、その外に何の音もない……そんな情景でありましょう。

俱会一処

阿弥陀如来の慈悲の根本は、この同感の心であります。苦悩の衆生を傍観することのできないまことであり、他人事として捨ててはおけない大悲心であります。

ただいま拝読しました『阿弥陀経』の中に、「俱会一処」

と説かれてあります。「俱に仏の世界で再びあわせよう」とお誓いくださるのであります。愛別離苦のこの悲しくも痛む胸の中を同感してくださったればこそ、再び相違うことのできる世界を持たそうと仰せられるのであります。

そこに、お念仏は私たちの心の底を流れてやまぬ深い、そして暖かいみ仏のまことであることが知らされるのであります。

そして、この悲しみの中に、悲しみを通してはじめて、心の底からうなずける世界だと知られるのであります。

※

何ものにもかえがたい可愛い盛りのお子さんにとこれっきりの別れであつていいもの

でしょうか。

再び相逢う世界がなければ承知ならぬ。それは、理屈ではなくて、子を亡くした悲しみの心の奥底に叫びつづける親心ではないでしょうか。

その心をはじめ「俱会一処」の仏さまのお約束を聞けるのであります。必ずあわせようとの阿弥陀仏の悲願は、今の私たちの悲しみを知りぬき、つつんでくださつてのものである事が味わえるではありませんか。

そこにはじめて「別れは逢う為にであった」とすら知らされるのであります。

別離の悲しみの中から、その悲しみが大きければ大きい程、み仏の慈悲もまた限りなく深いものであることを知らされ、そのゆたかなみ胸の中に、先きに逝つた子も残されて泣いている親も、共にひとしく抱きとられてあることを知らされるのであります。

悲しみの中にも大いなる安らぎが恵まれるのであります。

重ねて申し上げます。

この悲しみを決して無駄にはしていただきいますな。今のその涙を無にはしていただきいますな。どうぞこの悲しみを通して、いよいよ「真実の教」に耳を傾けてください。私の願いではなく、それが如来さまの願いなのでございます。そして、きつと、きつと子供さんの願いでもございましょう。

（『小さな命 大きな願い』より）

寺内だより

み仏にいだかれて〔葬儀勤修〕

9月16日御往生

南町

竹田 勝美様(88)
喪主 竹田 幸司様

9月23日御往生

南町

増本ミサヲ様(94)
喪主 増本 真一様

9月24日御往生

北町

河本 嘉子様(78)
喪主 河本 秀昭様

10月1日御往生

青木

井藤 義久様(71)
喪主 井藤加代子様

10月5日御往生

青木

岩中壽満子様(95)
喪主 岩中 敏夫様

10月7日御往生

大竹

竹田 和市様(49)
喪主 竹田 昌史様

10月7日御往生

松崎

村本 君子様(90)
喪主 村本 雅信様

10月10日御往生

北町

松重 厚子様(89)
喪主 松重 勝己様

10月26日御往生

中町

岡崎 寿夫様(95)
喪主 岡崎 幸雄様

11月2日御往生

山田

米田 伎様(95)
喪主 米田 温胤様

●ご恩を偲びて〔法事勤修〕(9月11日～11月5日)

【通津】谷岡吉見13、重村忠25、中谷和則1、岡林正規33、増田秀次100、中崎サチエ7、河本知之7、松岡祐子3、伊原哲男3、里原經祥3、【保津】村河多丸33、岡崎福美100、村中文行17、西山和子3、赤崎隆子1、森田清美3・17、【青木】村岡健33、井上孝子13、土井江津子25、広田尚志100、松上浩士33、【藤生】棚田正紀3、山中愛子25、藤重裕一3、藤本忠雄100・100、【南岩国】大崎三雄3・150、倉重秀樹25、【市内】森重俊治1、森田和夫7・50・100、守岡晴彦3、古谷幸枝7、【北九州】村本章二100

●ありがとうございます(永代経志納)

●百回忌のご縁に
金 壹拾萬円也

通津 増田 秀次様

●秋讚仏会法要余香 9月29・30日

【講師】成照星師

【参詣者】(29日)昼座102名、夜座34名、(30日)昼座63名

【お鉢米】木村 勲、津村昌宏、森田幸一、中崎清人

法要総代様、新仏婦役員様、通津南地区のお世話人様、ありがとうございました。

●ご案内します(専徳寺倶楽部)

▼境内清掃作業―専徳寺倶楽部

門徒男性による境内清掃作業を行います。夕方からは楽しい懇親会もあります。ご参加お待ちしております。

【日時】12月16日(土)・15時半集合、18時より懇親会。

【申し込み】お寺へご連絡ください(連絡先は、一頁目に記載)。

●ご報告いたします

岩国組秋季仏婦研修会 9月20日

【会 所】仏性寺

【参加者】河本多喜子、塩中幸枝、村中久子、村河久美子、梶本美代子

西嘉穂組(福岡教区) 仏婦来寺 10月2日

住職の実弟が引率者となり、90名の方がご来寺くださいました。

音楽礼拝と前住職による法話の後、岩国組の音楽グループ「五蓮華」による仏教讃歌の演奏を聞きました。

